

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Chen Hong
出身地：中国・北京
所属：中国社会科学院世界経済・政治研究所シニアフェロー
日本滞在：2005年4月～10月

建物にみる日本の発展

陳虹

中国には昔から「安居樂業」という言葉がある。安穩で快適な家に住むことで、初めて安心して仕事にも打ち込めるという意味である。この言葉の影響か、中国の大都市でも著しい経済発展による建設ブームで、工事現場があちこちに見られる。最近では、購入したばかりの新居に引っ越し友人も身近に増えた。住宅建設の発展と同様、中国の大都市では多くのオフィスビルも新たに建設され、一部古いビルも補修工事やリフォームが行なわれている。中国の私の研究所ビルも数年前に補修工事が行なわれたばかりである。今まさに中国では住宅情報も多く溢れているため、今回の来日以来、日本の建築物、特に建物内の細部にまで、私は気にかかるようになっていた。

日本の建物の内装、施設で印象深かったのは、建物の機能性と応用性を重視する点である。特に技術的要素は他に比を見ない。アジア経済研究所でも、研究棟内部が大きな柱となって建物全体を支え、装飾もしつこいも全くない、コンクリートむき出しの様相である。階段も鋼材をはりにしている。さらにビル全体に中央制御のシステムが配備され、空調、室温管理から窓の開閉に至るまで全てこのシステムで管理されている。就業時間外でも、電子カードを使って建物

内に入ることができる。共有スペース、手洗いの照明等は赤外線制御で、人が入ると自動的に明るくなり、人がいなくなると自動的に暗くなって消えるのだ。

アジア経済研究所のみならず、東京大学も数年前に経済学部のビルがこのように新しく建てられた。これらのことから、日本では建築の設計段階から、資源を節約し、環境にやさしい技術を最大限に駆使し、かつ環境保護も重要視しているといえる。建物の機能性が最大限に発揮され、その建物の使用者をも考えた設計であるのだ。

ここ数年、中国は発展途上国として、職場のみならず、居住環境にも大変化がみられる。私が在籍している中国社会科学院に、新しい図書館が建てられた。外観から見ても立派な建物であるし、内装も現代的である。更にここ数年、北京では新築、補修されたオフィスビルも増加した。住宅においては、私の研究所の多くの同僚も新居を購入、引っ越したことは先に述べたが、面積は一五〇～二五〇平方メートルと広く、二階建ても多い。郊外にさらに別宅を購入し、両親や子供と週末を過ごす者さえいる。ところが、中国は住宅のみならず、オフィスビルでも技術レベルの面で、日本と比べるとまだまだだ。

第一に、中国の建築物の老朽化は非常に速い。中国では建物を建てる時、事前に重大な記念日を決めておいて、その前までに必ず工事を完了させて引き渡すことが重要視されている。「向〇〇記念日献礼」という旗が建築工事現場にみられるのもその理由だ。しかし工期に間に合わせる事が不可能なため、建築の品質にも影響を及ぼす場合がある。一九九〇年にアジア体育大会のために北京に中国体育博物館が建てられたが、完成から一五年しか経っていないこの建物が既に危険な状態になったことを、中国の関係機関が最近公表したのである。

第二に、中国人は往々にして、建築外観の豪華さに非常にこだわるため、建物の細部には気をつかわないので、その居住者にとって不都合な面を見落とす場合がある。例えば水道の蛇口からの水漏れや、塗料の中に有害物質が多く含まれ居住者の身体に悪影響を及ぼすなど、といった点だ。

これらのことから、中国の発展は「従無到有」（無い所から有る物を作る）段階である一方、日本は「従有到好」（有る物を更によくする）段階と言えよう。発展途上国と成熟した先進国との違いがここにある。中国の発展もこの差を縮めてほしいものだ。

（原文日本語／前海外客員研究員）